

誰もが自分の人生の主役になれる町に

男女共同参画 vol.40

今年放映された NHK 連続テレビ小説『虎に翼』は大正から昭和にかけての物語。「女のくせに」「女らしい振る舞いを」と言われるたびに、「男として」「男だから」と聞かたびに、「はて？」と疑問を投げかけ、「男か女かでふるいにかけられない社会に！」と真っすぐな言葉で立ち向かう主人公の寅子に、今を生きる視聴者も自らの生きづらさを重ね合わせ多くの共感を集めました。また、壁に墨書きされた憲法第14条「法の下での平等」の条文のシーンは、強い印象を残しました。脚本家の吉田恵里香さんは、「普通」（性別による違いや役割の思い込み）の呪縛を解き、“男か女ではなく一人ひとりが主語になる世の中を”という思いを物語に込めたとインタビューに答えています。

性別による固定的な役割分担に基づく社会構造は、『虎に翼』の時代に限らず現在も存在し、女性の経済的自立や男性の家庭への参画も困難にしています。昨年度、本町で実施した住民意識調査では、ほとんどの人が、性別にかかわらず経済的自立と生活上の自立ができる教育や子育てが必要と答えている一方で、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てる」考え方に賛成又はどちらかといえば賛成と答える人の割合は年代が高いほど高く、全体で5割を超えています。ただし、子育て中の人が多い30～40代の女性は、反対又はどちらかといえば反対の割合が7割を超え、性別にかかわらず一人ひとりを尊重した子育てが必要と考えています。なお、この年代の女性は、他の性・年代に比べ男女の地位の不平等感や生きづらさを強く感じていることが、同調査でも明らかになりました。

「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てたほうがよい」という考え方について

単位：％

本町では、このような意識調査の結果も踏まえ、昨年度『瀬戸内町男女共同参画推進総合計画』を策定しました。そして、この計画に基づき、今年度、各学校で子ども達と保護者をはじめ地域の方々が、人権やジェンダー※平等について学び合う事業をスタートさせました。参加者の「はて？」から対話が進んでいます。（町広報誌9月号で紹介）

※ジェンダーとは、社会的・文化的につくりあげられた「男性像」「女性像」といった男女の別。これによって人や社会が男女の役割や性差に固定的な思い込みや偏見を持つことで、格差や差別が生まれることがあります。

自分自身が生きづらさから解放され、人生の可能性を広げるため、そして、子ども達が自分の翼でその人生を羽ばたくことを見守り、支える大人であるため、当該事業をはじめ男女共同参画の学びにぜひご参加ください。

事業に参加した子供たちの感想は、12月の人権週間にきゅら島交流館と町のHPで紹介します。

